

<研究ノート>

## 社会福祉における援助の本質

The essence of social welfare support

梓川 一<sup>1</sup>

### 要 旨

本論は、千里金蘭大学での福祉教育を振り返りながら、社会福祉援助の意味とその本質について3つの視点から再考する。第1の視点は、概念把握である。ソーシャルワークの概念を確認し、専門職者の要件を専門性の保持、倫理と責任にみる。第2の視点は、歴史的変遷と援助観である。確立期・発展期・統合期・批判期に沿って援助観の変化・揺れを確認する。第3の視点は、価値認識の考察と検討を行う。①学問としての社会福祉学に価値認識は必要であるかの検討、②功利主義の考えは社会福祉援助に通じるかの検討、③家庭において価値認識はどのように形成されるかの検討、④人間の尊厳、実存主義から社会福祉の価値認識の意味の検討、以上4点である。最後に、援助の本質を再考する。援助の関係は、優劣の関係性（優越感と劣等感の認識）に基づいているという点に焦点をあて、専門職者は援助の意味・目的を改めて自覚すべきであることを提言する。

キーワード：ソーシャルワーク, 倫理, 価値認識, 専門職, 援助  
social work, ethics, value recognition, profession, support

### はじめに

千里金蘭大学の福祉担当教員として、現4年生の卒業をもって丸8年になる。人間社会学部・社会福祉コース、あるいは現代社会学部・福祉クラスターに所属した40名余りの学生たちが社会福祉学を学び・巣立ってくれたことになる。昨年の8月、京都町屋（宿泊）にて第1期生の同窓会が開催された。夜遅くまで語りあい、思い出話に花が咲いた。卒業生の多くが福祉現場で対人援助の専門職者として働いている。ただ、福祉現場は厳しい状況なのである。例えば、一般に土日は休みではない、夜勤もある、食事・排泄の介助もある。大学で体得した基礎的な知識と技術をもって、卒業生たちは専門性を発揮して社会福祉実践をしている。

こうして卒業生たちと再会すると、最近の福祉現場での課題、つまり、組織上の課題、人間関係上の課題、専門職者としての課題、利用者の方々との向き合いにおける難しさを熱く話してくれる。それほど本気で頑張っているのである。大学や実習現場という穏やかな環境においては実感を伴っていなかった課題が、今ではリアルに・生々しく感じ取れているのであり、社会人4年目の彼女たちは果敢に正面から向き合っている。

教え子たちから教わることは多い。この8年間、金

蘭において福祉教育に携わってくると、改めて常々「福祉の援助とは何か」「専門職とは何か」を再考することができる。そして学生たちとともに「講義・理論」と「実習・実践」のはざまに起こりうるディレンマ・矛盾に焦点を当てながら、その根源的内容をとらえ直すことができる。しかし、これらは単純明解に答えを出すことはできない、人間の存在、価値・倫理、専門性に関わる内容であり、講義や演習を通じて学生に投げかけてきたものでもある。

金蘭における8年間の福祉教育を振り返って、私なりにここに整理しておきたいと思う。また卒業生たちへのメッセージも込めておきたいので、ぜひ大学での学びを思い起こし、実践者・専門職者の立場から実感してもらえとうれしい限りである。

### 1. ソーシャルワーカーの専門性

#### (1) ソーシャルワークの定義

ソーシャルワーカーとは福祉現場で働く対人援助専門職者のことであり、最近では医療ソーシャルワーカー、学校ソーシャルワーカー、家族ソーシャルワーカーなど、各分野での活躍が期待され、専門分化が進められつつある。確かにその専門性が発揮できる場面は拡大しつつあるが、日本の社会においてソーシャル

ワーカーが認知されているとは言い難い。例えば、専門職が社会的に認知される条件の一つに職能団体の存在とその所属があるが、日本における社会福祉の職能団体（日本社会福祉士会、日本精神保健福祉士会、日本医療社会事業協会、日本ソーシャルワーカー協会、日本介護福祉士会）も、「専門職者間において」はよく知られている状況なのである。

ソーシャルワークとは何か。ニール・ソンプソンは著書『ソーシャルワークとは何か』<sup>1)</sup>の中で10項目を挙げる。例えば、①人々のニーズや環境をアセスメントすること、②個人・家族・グループ・コミュニティにおいての問題を解決し、促進的・支援的活動に従事すること、③他の専門職者とともに、支援効果を上げるために多職種による取り組みに貢献すること、④アドボカシーを行いアレンジすること、などがある。

国際ソーシャルワーカー連盟の定義は、目的・過程を明らかにしたわかりやすいものである。「ソーシャルワーク専門職は、人間の福利の増進を目指して、社会の変革を進め、人間関係における問題解決を図り…。ソーシャルワークは、人間の行動と社会システムに関する理論を利用して、人々がその環境と相互に影響しあう接点に介入する。」（下線は筆者による）。人間の福利あるいは人間の幸福とは何か、ここに基準や尺度を設定することはできないため、厳密な把握は困難である。さらに社会改革・改良の実現には、マクロ的に社会の構造やシステムを捉えなければならないが、常に社会は変化するものであり、人々との個別的相互関係に関わっていくにはミクロ的な繊細さも要求される。極めて難解なテーマにソーシャルワーカーは取り組まなければならないのである。

また、全米ソーシャルワーカー協会（1973年）によれば、ソーシャルワークとは「個人・グループ・コミュニティが、社会的機能を強化し、回復するように、これらの目標に対し、好ましい諸条件を創造するように援助する専門職の活動」である。個人・人々にとって「好ましい条件」とは何か。ここにも主観的要素が内包されるゆえに、ソーシャルワークが目指す援助対象には個々人の個別性・多様性が存在することになる。

本学の人間社会（現代社会）学部において指定科目を修めることにより、社会福祉士国家試験の受験資格が取得できるが、この社会福祉士とソーシャルワーカーがよく混同される。社会福祉士は、「社会福祉士及び介護福祉士法」（1987年成立）により国家資格化された。当時は厚生省も他の専門職（看護・家政婦の関係団体）も介護福祉士の資格については、その業務

がどれほど他職種との垣根を越えるのだろうかという強い警戒感にも似た関心をもっていった。しかし、社会福祉士の資格要件や業務については十分に論議されないままに法制度成立が先行したため、「社会福祉士とは何か。その業務および専門性とは何か。ソーシャルワークとは何か」という存在意義についての論議（＝本質論）に踏み入らないままに、いわば見切り発車をしてしまった。

社会福祉士は、2007年には法制度上の定義規定が見直され、「専門的知識・技術をもって、福祉に関する相談に応じ、助言・指導、福祉サービスを提供する者又は医師その他の保健医療サービスを提供する者その他の関係者との連絡及び調整その他の援助を行うこと（相談援助）を業とする者」（下線は筆者による）となる。社会福祉士の独自性とその専門性をより明らかにするとともに、他の専門職者と連携を通じて社会福祉士の専門性を発揮することが明文化された。日本学術会議2003年社会福祉・社会保障研究連絡委員会報告においては、ソーシャルワークとは社会福祉援助のことであり、「人々が生活していくうえでの問題を解決なり緩和すること…。日本では、国家資格である社会福祉士及び精神保健福祉士がソーシャルワーカーとして位置づけ」られて、その関係性を公言している。しかし、現実には社会福祉士は名称独占であるため、より高度・独自の専門性が社会的に認知されにくい面もある。こうして社会福祉士は一般社会的によく知られていないことから「顔が見えない」とも、「顔が多い」<sup>2)</sup>とも言われてきた。

## （2）専門職者の要件

専門職者の要件に関する代表的な先行研究や提言に以下の①～④がある。そこには各時代における共通点がある。ソーシャルワーカーが広く社会に対して対人援助の専門職と認められるためには、第1に、「専門性」を保持している必要がある。専門的理論・技術・知識はもちろんのこと、組織・団体内部における教育や訓練のシステムが整備されていることも不可欠である。第2には、専門職が組織化されており、専門職者自身あるいはすべての専門職者が信用できることである。一人の専門職者が社会的に信用を裏切る行為をするならば、その信用の失墜は専門職全体に波及することになる。ゆえに専門職者としての自覚と責任が伴うのである。

- ①フレックスナー：講演「ソーシャルワークは専門職か」(1915年)
  - ①社会科学における基本的準備
  - ②伝達可能な専門的技術
  - ③テストによる専門的資格
  - ④専門職の団体
  - ⑤専門的実践のための綱領
- ②グリーンウッド：論文「専門職の属性」(1957年)
  - ①体系的な理論
  - ②専門的権威
  - ③社会的承認
  - ④倫理綱領
  - ⑤専門職的副次文化
- ③ミラーソン：論文「資格化団体」(1964年)
  - ①公共の福祉という目的
  - ②理論と技術
  - ③教育と訓練
  - ④テストによる能力証明
  - ⑤専門職団体の組織化
  - ⑥倫理綱領
- ④嶋田啓一郎：著書『社会福祉体系論～力動的統合理論への途～』(1980年)
  - ①体系的理論
  - ②専門職的権威
  - ③社会的承認
  - ④倫理綱領
  - ⑤専門職的教養

倫理という視点からも専門職の要件を確認しなければならない。新明解国語辞典(三省堂)によると、倫理とは「行動の規範としての道徳観や善悪の基準」である。例えば、日本社会福祉士会は2.5万名超の会員を抱える巨大職能団体であり、その倫理綱領はソーシャルワーカーのあるべき姿勢を広く社会に公示し、社会的承認を求めている。社会に対しての専門職者としての責任を次の重要な2点に集約する。

まず、「価値と原則」である。対人援助専門職として不可欠な要素であり、次のようなものがある。①人間の尊厳 ②社会正義 ③貢献 ④誠実 ⑤専門的力量である。つまり、人間をかけがえのない存在として尊重し、倫理綱領に誠実にして社会貢献し、そして専門職としての専門性を高めよということである。

次に、「倫理基準」である。これらは専門職であるための基準であり、以下の4つの倫理責任である。過去においてソーシャルワークが「未だ専門職ではな

い」「誰からも愛されなくなった」と揶揄された時代を思い起こせば、専門職者が対人援助・実践できるための必要条件である。

- ①利用者に対する倫理責任である。利用者の利益最優先とすべきとする基準であり、ソーシャルワーカー個人の利益を求めるものではない。
- ②実践現場における倫理責任である。利用者とうまく向きあう場面において、上記①を重視した上での業務改善とその推進が要求される。
- ③社会に対する倫理責任である。常に社会に対しての責任＝社会的・倫理的責任を要求される。ソーシャルワーカーは、専門性を活かして社会に貢献し、時に社会改良にも努める。
- ④専門職としての倫理責任である。専門職としての自覚である。時代・状況・関係性にも対応できるように、高度な知識と技術、暖かな人間観、常に専門性の向上に努めることなどが求められる。対人援助を職業とするソーシャルワーカーが果たすべき責任である。

## 2. ソーシャルワークの発展過程にみる援助観の変遷

### (1) ソーシャルワークの基礎確立期(～1920年)における援助観

慈善組織協会(COS)は英国において組織化され、その後、米国に伝わる。慈善組織協会の主たる活動である友愛訪問は、社会的に貢献する点においては評価されていたであろうが、フレックスナーは「ソーシャルワーカーは未だ専門職ではない」という主旨の講演をしている。

その後、リッチモンドがケースワーク(以下、個別援助技術と同義とする)を科学的に体系化した功績は大きい。その著書『What Social Case Work?』の中で詳しく説明しているように、サリヴァン女史の教育実践から「環境の力を活用して、人格の発達を図る方法」を学んでいる。そして彼女の著名な定義がある。

「ソーシャル・ケース・ワークは、人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通して、パーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている。」<sup>3)</sup>

この定義づけには「環境とは単なる空間としての環境だけではない」という意味深い説明がある。つまり、社会環境においては、人間関係や社会関係が含まれることは明らかであるが、さらに人間の思考、人間の能

力も含まれる。こうした広範囲な環境の概念をもって、ソーシャルワークはその本質的な実践・援助を達成することができる。

## (2) ソーシャルワークの発展期 (1920~1950年) における援助観

ケースワークの考え方は、「人間と環境」(リッチモンドの定義)から、「人間の内面」を焦点化する方向(=フロイトを代表とする精神医学・心理学)へ傾いていく。どれほど生活環境が豊かで経済的に恵まれているようにも、内面に悩みをもつ人々の存在に気づかされ、人間の内面の援助こそが重要であると捉えるようになる。またソーシャルワークのアプローチ方法も、援助者がクライアントに働きかける過程を重視する診断派、クライアントが援助者に働きかける過程を重視する機能派に大きく分かれていく。

資本主義諸国においては、経済のシステム・構造的な問題点を意識することなく、世界のマーケットにおいて株や外貨などの金融取引が投機目的に過熱すぎた結果、1929年に世界恐慌が出現した。経済活動には介入しない、いわゆる自由放任路線(=資本主義経済の暗黙のルール)が裏目に出たことになる。当時、アメリカ合衆国はいち早く修正路線を打ち出し、公共事業創出により失業者対策を実行した。このニューディール政策とは修正資本主義理論(ケインズ理論)として、政府が経済に介入して経済変動を調整したのであった。

以上の社会状況から、人間の内面に向きあい援助できたとしても、日々の生活が第一であることを人々は実感したであろう。社会や生活の環境整備こそが重要であると思い知らされ、再び環境重視へと傾いていく。このように発展期においては「人間の内面の重視」から「社会環境の重視」というプロセスを辿り、ソーシャルワーク・援助に対する人々の認識・社会の要求は、いわば振り子のように左右に振れたのである。

## (3) ソーシャルワークの統合期 (~1960年) からソーシャルワークの批判期 (~1970年) における援助観

発展期とは、時代における環境や風潮にも影響された迷走期でもあったが、行き詰まった末に、「人間と環境」を捉えなおす原点に立ち返る。この主たる流れから、診断派と機能派の統合化、家族診断・援助の導入、ソーシャルワーク概念の拡大化という変化が起きている。つまり、統合期である。

一方で、社会に拡散する様々な貧困が指摘され、貨幣的貧困から非貨幣的貧困という明解にとらえきれない社会的実情が浮き彫りになる。いわば「貧困の再発見」である。さらに人間社会そのものに内在する偏見と差別観から、人間同士が苦しみあう出口の見えない苦悩と不幸へ、社会的矛盾は加速化・拡大化し、社会・世界は悲観的な状況へ変貌を遂げる。ソーシャルワークはその力量を発揮できないままに、「愛されぬ専門職」「ケースワークは死んだ」(パールマン)と批判を受ける。思うに、すべて見放され・見捨てられたわけではなく、この厳しい批判の裏には新しい進展への期待はあった。

1980年代には隣接する学問や科学の成果を取り入れながら、新しい援助観・アプローチ方法が誕生する。専門分化された方法や技術を統合していく流れ、ソーシャルワークの共通基盤を確立していく流れが挙げられる。ポストモダンとして、筆者も注目するナラティブ・アプローチがあり、エンパワメント・アプローチ、ストレングスモデルもある。

## 3. 社会福祉に通じる価値認識

### (1) 学問に価値は必要か

社会福祉の講義・演習を通して、私は「社会福祉学とは何か」「学問とは何か」を学生に問いかけてきた。日本福祉大学教授であった島田豊は、「わからないことに耐えられること、学問は無知の自覚から始まる、ほんとうのことを追求する」<sup>4)</sup>を挙げて、学問に取り組む姿勢、講義を受ける姿勢について丁寧に説明する。つまり、学問の追求には、他から規制・制約されない自由が確保されなくてはならない。探求し続けるためには自由な心をもつ「ありのままの自分の存在」も必要なのである。

大阪市立大学大学院教授であった秋山智久は、マックス・ウェーバーの著書『職業としての学問』の一節を引用して、客観的な事実の確定のみを行い、「いかに生きるかに答えない学問」「価値観を語らない学問」は無意味な存在であるという<sup>5)</sup>。学問にも価値は入り込み、学問は価値を語るものである。さらに学問は生きることについてを指南してくれるのである。学問・価値観・生きることは引き付けあうことがある、そこに学問を追求する意味があり、大学生は学問・講義を聴く意味があるという教えである。確かに大学の講義には人生論・哲学があり、そこに本質と魅力がある、筆者は今も昔もそう実感している。

学問としての社会福祉学において、価値をどのように捉えるか。秋山は社会福祉学を「実践の学問」と認識したうえで、実践ができるためには、まず他者に「働きかける」こと、さらに「実践に価値がなければ働けない」<sup>6)</sup>として価値認識の必要性を言い切る。ただ、「価値を研究することは客観性・学問の発展の妨げとなるのではないか」という様々な学問論争（以下に紹介）も繰り返されてきた。社会福祉学が熟成していくプロセスにおいて、平塚良子も「社会福祉分野の実践の科学的探究の遅滞は、福祉をめぐる諸価値観の産物によることも一つの要因」と指摘し、学問に価値を入れることに難色を示してきた多数派の意識・姿勢を冷静に批判している<sup>7)</sup>。

さらに、福祉専門職の在り方について嶋田啓一郎は、「社会事業の対象とするクライアントは、文化的環境を体現する存在者でもある。その処置目的は、一つの文化的に形造られた価値判断を荷負っている。…従って社会事業の処置目標は、つねにわれらの価値体系に左右されることを忘れてはならない」として、価値認識の必然性を明らかにするとともに、ソーシャルワーカーの自覚についても触れている。<sup>8)</sup>

#### 【嶋田・孝橋による学問論争】

孝橋正一の著書『全訂 社会事業の基本問題』（ミネルヴァ書房）は、社会福祉の先駆的な研究者を次々と批判する名著であるが、各理論の本質を孝橋風に解釈した上で独自の理論を展開・批判していくことから学ぶところが多い文献でもある。孝橋は、資本主義制度・社会・経済の根本原則を前提に分析検討し、そこから社会事業の本質を科学的に探究する。つまり、資本主義体制には構造的な欠陥があることを解明して「終着駅のない研究の旅」（孝橋）を続ける。こうした孝橋理論は、もちろんマルクスの思想・哲学を拠り所としている。対して、「友はその長所において交わることをつねに信条とする」嶋田啓一郎も「孝橋論文によって真意が世に誤り伝えられているのではないか」という憂慮をもって、著書『社会福祉体系論』の第4章において、「資本主義社会の批判的研究のみが独走するのでは、社会福祉学の建設は不可能である」<sup>9)</sup>と、孝橋正一の批判に答えている。

#### (2) 功利主義の賛否

ロンドンの法律家の家庭に生まれ育ったベンサムは、幼少から優れた能力を発揮した。著書『道徳および立

法の諸原理序説』を通じて、「自然は人類を苦痛と快樂という、二人の主権者の支配のもとにおいてきた」と前置きし、人間とは快樂を求め、苦痛を避けようとする存在であると考えた。そして功利性の原理を導きだし、「最大多数の最大幸福」という功利主義を提唱した。彼によると、最も快樂の多い行為や行動が最善のものであり、さらに最も多くの人々が最も多くの快樂を手にすることができる行為や行動が最善のものとなる。

こうした考え方は現代社会にも通じるのである。功利主義を社会福祉の領域に当てはめると、社会のより多くの人々の幸福を目指すために社会福祉は社会や人々に関わり介入するが、たった一人の人間までは対象にはできないということになる。稀少難病者のように制度の谷間におかれ、公的支援の対象からこぼれ落ちて、援助を受けられない一人の人間もいるが、この一人の人間を例外的存在ととらえて、すべての人々を救うことはできないと解釈される。社会全体からすると致し方ないのである。

対人援助専門職者は「自らの実践のスタンスと立ち位置」について慎重に見つめ直すべきであろう。目の前に援助を求める、制度から零れ落ちた人を、専門職者は見殺すのであろうか。見て見ぬふりをするのであろうか。自らの生活に余裕がなければ、功利主義に従い・行動することもあるかもしれない。いかなる状況においても、それでもなお目の前の個人を助けようには、大きな勇気、暖かな人間観、自己犠牲という他人を愛する心が必要になる。しかし、専門職者の内面にも一人の人間としての価値認識があり、強制はできない。

ここで功利主義をテーマにしたある日の社会福祉演習を思い出す。学生から「すべての人々を幸せにすることはできないのですか」「すべての人々が幸せになることはできないのですか」という質問があり、その後活発な討論ができたのであった。現実にとらえるならば、残念ながら、前者の質問についてはすべての人々を最高の幸せな状態にすることは難しい。そもそも「最大の幸せ」「最高の幸せ」について決定することはできない。納得のいく幸せであろうか、その人にとっての幸せであろうか、それは他人が決めたりすることはできないのであり、また幸せの基準・尺度というものは主観的な要素が大きい。ゆえに、後者の質問については、すべての人々が幸せになることはできるだろうと考えられる。

### (3) 家庭における価値形成・認識

#### ①家庭内の価値認識

家庭内の養育や教育には、どのような価値認識があるだろうか。各家庭には独自の育て方・教え・方針がある。家庭環境・育ちが個人の価値観を形成し、個人は価値観を身に付けて、社会・人間関係を取り結び、自らの価値観をもとに新たな価値観を形成する。

では、どのような家庭の姿が根底にあるのだろうか。ユング心理学の第一人者であった河合隼雄は、著書『日本人とアイデンティティ』『新しい教育と文化の探求』において、日本人の家庭内における養育・教育の実際と理論について、心理学的視点から語るように解き明かしていく。そこには家庭の価値認識、父親の価値認識、母親の価値認識、子どもの価値認識、さらにカウンセラーという援助者の価値認識も示されている。以下に整理してみる。

昔(戦前)の日本は大家族であり、家庭内に火があった。例えば、囲炉裏という火を囲んで家族が集まっていた。家族の精神的な安らぎとしての火であった。しかし、高度経済成長期の日本は欧米の生活様式に憧れて、ダイニングキッチン、リビング、個室などを手に入れていく。核家族化と同時進行するように、日本の家庭内にも個人主義化が浸透していく。そして、家庭で顔を合わせながらその日の出来事について会話をすることも減り、家族の居場所・拠り所の空間、家族の「火」は消えていった。高度経済成長期の家庭内には、社会で生き抜くために、他人と比較して優れているほうが良いという価値認識に基づいた家庭教育が進められた。家庭環境・親の教育によって子どもたちは相対的比較による価値認識をもつようになっていく。

家庭内の変化は生活様式だけではない。河合氏は、母親の役割と父親の役割<sup>10)</sup>、家庭内教育についての変化が、家庭内の価値認識に影響する様子を説明する。父親には父性があり、母親には母性がある。父性に基づく公平性とは、いいものをいいと認め、ダメなものにはダメと頭ごなしに叱りつける。父には「切る」力がある。一方、母性に基づく公平性とは、いい子どももよくない子どももみんな認めてかわいがるのであり、まさに包み込む母性の愛である。母には「包含する」力がある<sup>11)</sup>。こうした公平性は、父性と母性のバランスがとれて子どもに向き合うことが肝要である。しかし、先述のように、家庭内では相対的価値認識が浸透することで競争原理が働く。例えば、父親は会社での仕事に多忙を極め、家庭内のことを見ることができない状況では、専業主婦である母親ひとりが家庭を見守らなけ

ればならない。ストレスを蓄積する母親は、本来の母性に基づく穏やかな公平性を発揮することができなくなり、子どもの心は安定しないのである。

#### ②子どもの価値認識

高度経済成長期の日本の家庭について述べてきたが、最近では共働き夫婦も増加している。父親の育児・家事参加率は低い場合には、母親は家庭の内と外で働くという状況となり、ストレスを増大させ、家庭内問題が起き得る温床を作ってしまう。さらに「親が子どもにどのように向き合い、子どもに何を期待するか」、こうした親の子どもに対する価値認識により、子どもの価値は決められてしまうことにもなる。

家庭内の事情について、教育心理学を専門とする柏木恵子は独自の研究を進め、著書『子どもという価値』では、多様な切り口から家族像を分析し、親が子どもをどのようにとらえて価値認識していくかを明らかにしている。子どもに対する価値認識について、柏木は「子どもと親がおかれている社会の条件」により異なることを指摘した上で、次の2つがあるという。第1に、経済的・実用的価値である。これは子どもに労働的な存在価値を期待しているのであり、行き過ぎると、強制的な労働や虐待に至る恐れがある。ペルー、コスタリカ、コロンビア、メキシコ、タイ、昔の日本に見られる<sup>12)</sup>。

もう1つが、精神的価値である。子どもの存在とは、①家庭に明るさをもたらす、②喜びや生きがいを与える、③充実感を与える、④自分も成長できる、⑤かけがえのない、というものである。オーストラリア、アメリカ、ベルギー、日本、シンガポールなどに見られるということであるが、ここにも親が子どもに期待する価値認識がある。大切なことは、子どもの存在価値の認識から、子どもの人格を尊重することであろう<sup>13)</sup>。

### (4) 丸抱えの尊厳と価値認識

社会福祉の演習で「愛について～恋愛は本物か?～」を学生と語りあい・討論する。渦中にある学生たちは日々苦悩していることもあるようだが、学生の恋愛はすべて素敵な物語であり、なるほどさまざまな愛の姿があると実感する。ここで愛について考える。

条件付きの愛がある。これは異性を愛する場合にもその容姿・職業・財産・地位・名声などを条件として愛するものであり、万が一その条件が崩れることになると冷めてしまう愛である。意外と多いかもしれない。それに対して無償の愛がある。母性の愛、マザー・テ

レサの愛とも言われる。愛する人がどのような状態・状況におかれようとも変わらない愛であり、例えば、母親がわが子を無条件に愛して抱きしめる姿が思い浮かぶ。マザー・テレサは豊かな愛をもって貧困の人々、死にゆく人々の心身を救うのであるが、マザー・テレサの愛に込められた教えには、人間の存在すべてを受けとめる包容力がある。人間の社会生活から作り出された相対的価値・評価基準などは存在しない。

また、条件付きの愛に似ているが、所有の価値を重んじる愛もある。あなたを愛するとしながら、実はその内面では個人（あなた）の所有するものを基準にして個人の価値を評価しているのである。思うに、向き合う相手を受しているのか、所有物を愛しているのか、よくわからない。こうした価値認識に対して「ただ存在する価値」というものがある。所有するものやその人に付随する条件はいつでもいいのであり、「ただあなたがいてくれるだけでいい」のである。「丸抱えの尊厳」（秋山）ともとらえることができる。マザー・テレサは、「すべての人は望まれて生まれてきた存在であり、存在する意味がある」という。ドイツの代表的哲学者のカントは、ルソー『エミール』の影響を多分に受けて、人間の価値・人格を重視し、「人間とは何かができることに尊厳を持つのではなく、人格を持つことに尊厳をもつ存在」と唱えている。これらは社会福祉援助の根底におくべき価値認識である。

## （5）実存主義と福祉の思想

### ①社会福祉に通じる実存主義

実存の哲学者であるキェルケゴールの著書『死に至る病』を精読すれば、極めて奥深い神秘的な世界へと引き込まれてしまう。死に至る病とは絶望のことであり、「絶望は精神におけるすなわち自己における病」であるとして、絶望者の苦悩とその心の奥底を豊かな例えを織り交ぜながら展開していく。「絶望の苦悩は死ぬことができない」のであり、それは「死という最後の希望さえも遂げられないほど希望がすべて失われている」のだという<sup>14)</sup>。生と死のはざまにおける、自己を失った人間存在とその心理を恐ろしいまでに鋭く暴き、ここから人間の存在・実存の哲学へ導いていく。現代社会において日々の生活や環境に翻弄されて、どのように生きていくか、自分はどのような存在か、わからなくなってしまう人も多い。ソーシャルワークは、こうした精神的に苦悩する人にも向き合っていくのである。

社会福祉においても竹内愛二は実存主義を唱える。

山本有三の『路傍の石』の一節、「われはこの世にひとりしかいないというという意味だ。…世界中にたったひとりしかいないんだ。」「人生は死ぬことじゃない。生きることだ。何よりも生きなくてはいけない。たったひとりしかない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかったら、人間、生まれてきたかいがないじゃないか。」<sup>15)</sup>を取り上げて、人間の独自性とその存在、さらに人間の生涯の一回性について強調し、実存主義の根拠を明解にしている。つまり、人間の存在は「尊厳性を持つものであり、一人一人の存在は、かけがえのないもの」ということである<sup>16)</sup>。

哲学と社会福祉実践における実存主義を見てきたが、実体験に基づく実存主義には明らかに迫力がある。アウシュビッツ収容所での生という「人間を絶望と絶滅に追い込む地獄の体験」をした فرانクルは戦後に奇跡的に自由の身となり、精神医学者としての立場を貫き、客観的に経験的事実をとらえ、あるいは自己分析し、数々の名著を著した。なかでも『夜と霧』『死と愛』『苦悩の存在論』『意味への意志』『それでも人生にイエスと言う』は、講義や演習を通じて学生に紹介してきた。実存主義から生きることを考えてもらいたいからであった。

ここでフランクルの教えをまとめてみる。人間は3つの価値（創造価値・体験価値・態度価値）を発揮するが、その中でも態度価値は受け身的にしか生きることができない状況においてなお発揮できる価値である。さらに人間は苦悩する存在であり、苦悩・苦痛・不幸にも意味がある。すべての人生に意味がある。人生には幾多の困難や苦悩があるにもかかわらず、無限の意味が存在する。そして人間は人生・生きることを意味を感じ取ることができる。自分の人生を意味ある人生にしたいという「意味への意志」こそ、あらゆる極限状況や苦悩の中で人間を支えるものである。人生における苦悩と運命について、自分の人生は自分のものであり、その一回性のなかで向き合い、使命を果たし、責任を負うという。

「時には運命を率直に自らに担うことを要求するのである。…人間は苦悩に対して、彼がこの苦悩に満ちた運命と共にこの世界でただ一人一回だけ立っているという意識にまで達せねばならないのである。何人も彼から苦悩を取り去ることはできないのである。何人も彼の代りに苦悩を苦しみ抜くことはできないのである。まさにその運命に当たった彼自身がこの苦悩を担うということの中に独自の業績に対するただ一度の可能性が存在するのである。」<sup>17)</sup>

こうしたフランクルの教えは、次の点で社会福祉の援助や価値認識にも通じている。第一に、受け身的な状況においてなお人間の価値は発揮されることである。例えば、重症心身障害の子どもたちは、重度の身体障害と知的障害を併せ持つ最重度の障害児であり、一見すると、受け身的にしか生きれないと誤解をする人もいる。私は、大学の付属病院にて研修やボランティア実践を通じて最重度の障害をもつ彼らと向かいあったことがある。彼らの発語・心の叫び・表情は、ともに過ごすうちにすべてに意味があり、感情豊かな会話ができることを実感した。彼らの存在が私の人間的に閉ざされた心に明かりを灯してくれた。彼らは生きることの意味を穏やかに教えてくれる。

第二に、人生において自身の運命・苦悩を受け入れて服従して生きることである。重い障害をもって生まれてくる子どもたちがいる。厳しいことではあるが、こうした現実を受け止めて生きていくのである。先天的な障害の場合も、中途の障害の場合も、いつかある期間・時点で悲嘆と喪失感をもって、自らの人生とその運命を受容していく過程がある。

## ②福祉の思想と価値認識

重症心身障害児の心と生活と人生を世に知らしてくれた糸賀一雄は、びわこ学園や近江学園を創設した実践者である。著書『福祉の思想』は、人間の存在と価値、さらに人間福祉の理念と哲学を社会・人々に広く訴えかけるものである。

第一に、人間の価値観である。「人間は価値として何を問うか」<sup>18)</sup>。格差と差別によって人間社会は支配されるという。1960年代の高度経済成長期においては、他人と比較して優れてこそ評価される時代であった。右肩上がりの経済成長期においては、「できること」「結果を出せること」がより良い評価を受ける。教育現場、企業、地域、家庭においても相対的価値認識が浸透していった時代にあつては、糸賀の主張はかき消されてしまうかもしれないが、それでもなお社会に訴えかけた糸賀の功績は大きい。

そのうえで絶対的価値の認識を唱えたのである。生まれながらにして能力の格差（＝宿命的な格差）がある障害者が、社会において相対的比較による価値評価を受けるのであれば明らかに不利であるという。その子にしかない光り輝く存在価値を評価することこそが絶対的価値認識なのである。

第二に、発達保障の考え方である。重度の障害をもつ子どもたちとは、①個性的な自己実現ができる

存在、②立派な生産者、③自ら輝く素材そのもの、④限界状態に置かれているこの子らの努力の姿、である。この子らしい存在と成長の姿がある<sup>19)</sup>。そして彼らが人間に対する価値認識の在り方を教えてくれるのである。

## 4. 援助の本質の再考

他人を援助することは、一見すると、人間的にも美しく、素敵なのである。しかし、本当にそうだろうか。他人の援助を職業とする専門職者は、援助の意味・本質を見抜いておく必要がある。

### (1) 人間の内面に潜む差別感～優劣の関係性～

米国の慈善組織協会（COS）のメンバーであったリッチモンドは、友愛訪問活動の内部に潜む問題点を見逃さなかった。友愛訪問とは当時の対象者である貧困者を訪ね、力添え・励ましながら援助・支援を目指す慈善活動である。しかし、リッチモンドは友愛訪問における「援助者－被援助者の関係性」に優劣関係・上下関係がありはしないかという疑問をもつ。

つまり、友愛訪問員には「援助をする側」として優越感があり、貧困者には「援助を受ける側」としての劣等感があるのではないか。援助を施す者は優れた立場にあり、援助を受ける者は劣った立場にあるという人間関係ができあがってくる。援助の関係性を築いていくプロセスにおいて、意識的あるいは無意識的に、彼らに心理的変化が起きてくることもあるだろう。

援助を施すことを通じて、人間が変化・変身すること、また援助の関係性には表と裏があることは誠に恐ろしいことである。援助の根底にあるもの、援助者の心の奥底にあるものは何か。援助関係を継続するうちに、どのように優劣の意識が芽生えてくるのであろうか。つまり、ここに人間の内面に潜む差別感があるのでないかと考えられる。このように援助の意味をとらえ直す必要性があり、援助専門職者は意図的に継続的に自身を見つめ、自己覚知していくべきなのである。

### (2) 援助がもつ魔力

演習において学生たちに聴いてみることもある。「電車の中で高齢者に席を譲ったことがある人？」の質問には、多くの学生が経験している。「そのとき、どのような気持ちになったか？」の質問には、「当然のことをしただけです」「黙って立つだけで、なにも



感じません」という返答もあれば、「いいことをして、その日はいい気分になった」「心が晴れた気持ち」という感想もあった。

次に、「ボランティアをした後、どのような気持ちになったか?」「皆さんに喜んでもらえて、どう感じたか?」の質問には、学生たちはやや照れくさそうに「当たり前のことをしただけです」と言うものの、その後論議が深まり、その時の気持ちを思い起こしながら「本当はうれしかった」「ありがとうといってもらえて、またやりたくなった」「ボランティアをしてよかった」「いいことをしたと思う」「その日は気持ちよくなった」などの貴重な感想を語り出してくれる。ここでは席を譲ること、ボランティアをすることの良し悪しを確認しているのではなく、他人を助けた自分の心理を自問してもらっているのである。

学生たちの行動は、自分がいい気持ちになろうとして席を譲っているのではないが、結果として上述のような気持ちになっている。さらに気持ち良くなるということにも注意する必要がある。気持ち良くなった自分を分析するならば、他人を助けることに、どこかいい人、素敵な自分という気持ちはなかったかということである。さらに「それは他人のためにしようとしたのか」、結果として「自分のためになっていないか」ということである。

秋山は、援助・実践について他人を助ける素敵な行為としてだけ、表面的に・近視眼的にみてもならないことを警告する。「カニのたとえ」を例に挙げて、「社会福祉の関係者が、相手を援助するように見せかけながら実は傷をつけているという状況は多くある」と鋭く指摘する<sup>20)</sup>。他人のために助けているとしながらも、実は自分のため、自分の利益のためにしていないか。そうすると、援助とは「利他主義=他人のためにするのか」、それとも「利己主義=自分のためにするのか」、ここに明解な答えは出てこないが、「どちらに重心を置いているか」の感覚は自問することしかないだろう。

さらに人間としての自分、専門職としての自分を見つめ直すべきである。意識的にではなくとも、自分のためにするという行為に人間は傾くこともある。筆者が向き合った事例(\*プライバシー保護のため加筆修正する)に、父親から虐待を受け続けた女性がいた。彼女は社会福祉士を取得して、ソーシャルワーカーとして児童養護施設で働き始めた。その彼女が突然退職することになる。ここで考えておきたいことは、「なぜ、児童養護施設において働こうとしたのか。虐待を

受ける子どもたちを助けたかっただけだろうか。自分と同じ生い立ちをもって生きる子どもたちを援助したかっただけだろうか。なぜ、突然に退職することになったのだろうか。」ということである。

心理学者アドラーによると、人間の行動はすべて「自分の劣等感を、何か別の優越感で補償しようとするため」の手段であるという。秋山は、救世主コンプレックスについて「援助していこうとする人の内面には、人を助けることによって自分の内にあるコンプレックスを覆い隠そうとしたり、密やかな優越感を感じて自らの慰めとする心理が働く」という<sup>21)</sup>。上記の事例においても、自分にとっていやな醜い過去(=劣等感)を背負って生きてきたのかもしれないが、無意識のうちにその過去を削除したかった。援助をすることにより、醜い自分から、素敵な自分(=優越感)に変身しようとしたのではないか。つまり、援助には不思議な魔力が潜んでいることを、援助者は自覚しておくべきである。さらにこのような魔力に「援助の本質」があると考えられる。

### (3) 専門職者の姿勢

専門職者に求めたい姿勢として、以下の5つを挙げておきたい。

第一に、対人援助に価値の認識は必要であろう。事実の客観化認識だけでは実践はできない。他人にはわかりきれない価値観というものを、人はもっているものである。

第二に、当事者のもつ力を信じること、そして当事者を先生として教えて頂くことである。そのためには常に専門職者は謙虚でなければならない。

第三に、専門職者は常に自分を見つめなおし、援助の本質を再考すべきである。日々の仕事に奔走されることなく、立ち止まり検討する心のゆとりも必要である。

第四に、実践者も社会福祉学・学問について探究することである。常に、好奇心・向上心を持ち備えることである。学問・理論は実践上の迷いの途から誘導・方向付けをしてくれる。そのためには卒業生・実践者を対象とした「卒後教育」を大学が実践していく必要があるだろう。

第五に、生きることを考え・感じて、人間の存在を尊重できる専門職でありたい。ミルトン・メイヤーは『ケアの本質』において「他の人々をケアすることを通して、他の人々に役立つことによって、その人は自身の生の真の意味を生きている」<sup>22)</sup>という。

社会福祉の専門職に誇りをもってもらいたい。

#### おわりに～これからの社会福祉の向かうべき途～

筆者が継続している研究に「ピアカウンセリングの理論と教育方法」がある。難病患者に向きあい、癌患者に向きあい、ご家族に向き合う。常に当事者から教わるのである。金蘭での社会福祉教育では、当事者に向き合いながら実践し、心の支援・癒し・共感を体験することを重視し、学生とともに生きることを感じ・考えあってきた。演習においても、障害の受容、自殺・中絶、虐待・DV、尊厳死、癌告知・ターミナルケアなど、事例を通して討論・考察することで、学生たちが人生・生きることの意味とともに深く考えることができたであろう。

これからの社会福祉「実践・活動・研究・教育」も生きるものの意味を正面から問うていく必要がある。社会福祉実践は人々の生活支援をすることを本業として、人間と社会の関係性に介入する。人々の生活とはまさに人間が生まれ・死んでいく過程とその全体なのであり、そこにソーシャルワーカーは寄り添っていかなければならない。生活の始まりが誕生であり、死をもって人間はその生を完結できる。生に向き合い、死に向き合うことであろう。社会福祉もソーシャルワーカーも本気の覚悟をもって一人の人間に向き合うべきなのである。

最後に、謝辞をもってこの拙稿の締め括りとしてたい。金蘭で講義・演習をすること、そこには常に豊かな学びがあり、新鮮な気づきがあった。学生から教員も学ぶということである。金蘭での8年間、学生たちとともに歩み、彼女たちが元気に福祉実践をしてくれていることは、これからの私の励みになっていくだろう。「金蘭であなたたちに出会えたこと、それは私にとって幸運でした。」

社会福祉コースの先生方、野澤先生、小林保太先生、鳥海先生、樽井先生、小林良守先生とともに社会福祉の教育と実践に取り組むことができたことは、私にとって大きな財産となっていくにちがいない。私の研究・教育・人生観に明かりを灯して下さったのが先生方であった。心から感謝を申し上げたい。

#### 【引用文献】

1) ニール・ソンプソン、杉本敏夫訳『ソーシャルワークとは何か』晃洋書房、2004年、17頁。

- 2) 秋山智久、『社会福祉研究』第69号、79-80頁、1997年。
- 3) M・リッチモンド、小松源助訳『ソーシャルワークとは何か』中央法規、1991年、57頁。
- 4) 島田豊『学問とはなにか』大月書房、1979年、26-30頁。
- 5) 秋山智久『社会福祉実践論』ミネルヴァ書房、2000年、332-333頁。
- 6) 秋山智久『社会福祉実践論』ミネルヴァ書房、2000年、332頁。
- 7) 平塚良子他『人間福祉の哲学』ミネルヴァ書房、2004年、75頁。
- 8) 嶋田啓一郎『社会福祉体系論～力動的統合理論への途～』ミネルヴァ書房、1980年、13頁。
- 9) 嶋田啓一郎『社会福祉体系論～力動的統合理論への途～』ミネルヴァ書房、1980年、96頁。
- 10) 河合隼雄『母性社会 日本の病理』講談社文庫、1997年、36頁。
- 11) 河合隼雄『母性社会 日本の病理』講談社文庫、1997年、61頁。
- 12) 柏木恵子『子どもという価値』中公新書、2001年、3-7頁。
- 13) 柏木恵子『子どもという価値』中公新書、2001年、3-7頁。
- 14) キュルケゴール、斎藤信治訳『死に至る病』岩波文庫、1939年、27-28頁。
- 15) 山本有三『路傍の石』新潮文庫、1980年、135-137頁。
- 16) 竹内愛二『社会福祉の哲学－新実存主義的考察－』相川書房、1979年、71頁。
- 17) フランクル、霜山徳爾訳『夜と霧』みすず書房、1961年、184頁。
- 18) 糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス、1968年、55頁。
- 19) 糸賀一雄『福祉の思想』NHKブックス、1968年、177-178頁。
- 20) 秋山智久『社会福祉実践論』ミネルヴァ書房、2000年、344頁。
- 21) 秋山智久『社会福祉実践論』ミネルヴァ書房、2000年、344頁。
- 22) ミルトン・メイヤロフ、田村真他訳『ケアの本質』ゆみる出版、1998年、15頁。